



街並みや暮らしの変遷とともに  
大きな発展を遂げた昭和の札幌。  
その一場面に居合わせた方に、  
思い出の旅へと案内してもらいましょう。

第二回 札幌と映画

今回のご案内役は：谷井敬四郎さん(東宝プラザ取締役社長)

お気に入りの場面、心に刻まれた台詞  
かつて街中が銀幕の世界に夢を見た

終戦後、食糧不足や物価急騰など社会が混乱する中で、庶民にとって最大の娯楽は映画でした。どこの映画館も、楽しみに飢えた観客であふれ、立ち見が当たり前。人波で後方の座席がバリツ、バリツと音を立てて壊れる中でも、スクリーンを食い入るように見ているのを覚えています。

当時、私は旧制の中学生。映画鑑賞には、ほお齒の高下駄を愛用していました。それを履いて行くと、背が高くなるだけでなく、足を踏まれることもありません。わずか数センチでしたが、銀幕の世界が違って見えたものです。

終戦の翌年には、戦争による

終戦後、食糧不足や物価急騰など社会が混乱する中で、庶民にとって最大の娯楽は映画でした。どこの映画館も、楽しみに飢えた観客であふれ、立ち見が当たり前。人波で後方の座席がバリツ、バリツと音を立てて壊れる中でも、スクリーンを食い入るように見ているのを覚えています。

当時、私は旧制の中学生。映画鑑賞には、ほお齒の高下駄を愛用していました。それを履いて行くと、背が高くなるだけでなく、足を踏まれることもありません。わずか数センチでしたが、銀幕の世界が違って見えたものです。

終戦の翌年には、戦争による



東京から北で最も豪華な劇場といわれた松竹座(南4西3)を取り巻く人々。後の10年間で、市内の映画館数はピークに達する(昭和26年)

(北海道新聞社提供)



東宝プラザ(狸小路5丁目)の前身である日活館(昭和31年)

面の隆盛ぶりがお分かりいただけるのではないだろうか。昭和三十年代をピークに、テレビの普及やレジャーの多様化により全国的に映画館の数は減っていきます。映画業界では、客足の減少を食い止めるために、作品のカラー化をはじめ、スクリーンの大型化や音響設備の充実などを積極的に進めてきました。

さらに、今日、デジタル技術が進歩し、フィルムではなく、衛星配信による全国一斉上映という試みも始まろうとしています。無声映画から出発した映画——。今後も、時代とともにその可能性を広げながら、娯楽の中心として隆盛していくのでしょうか。

二一・三本)。こうした状況の中、終戦時には十二館だった市内の映画館数も、昭和三十五年には五十三館までに増加。日劇、東映、大映、日活といった製作会社の直営館が都心に並び立つ一方、地元の映画館も、山鼻、藻岩、桑園、円山、琴似、豊平、美園、月寒、白石、苗穂、北二十四条など市内一円に新設されました。当時の札幌の人口は約五十二万人。現在の人口が約百八十四万人で、映画館数が四十一館ということを考えると、そのころの映

※7月号の第1回で定山溪鉄道をご紹介したところ、同鉄道は白石、東札幌、苗穂、札幌の各駅からも乗客を運んでいたとのこと指摘を多数いただきました。ありがとうございます。